

禅（現代における見性悟道の実際）

まえがき

道を求める人、かつての自分と同じような状況や境遇に遭う人、本気で切実に求める人がいると思う。そういう人を勇気づけるような、ささやかなきっかけにでもなるかと思ひ、拙い著述をする事にした。

言葉というのは発するなり実際と乖離した形骸でしかないが、きつかけは言葉で伝えるしかない。語彙貧しく、（こいつは駄目だ）と思われても、最後まで目を通していただければ見所もあるかと思う。

禅を追求し始めて修行に決着がつくまで丁度二十年、空しくもそれなりに鍛えの入った求道において、正法は他の教にはない事、疑いに疑い抜いて回り道をしながら確かめてきた者として提示しておきたい。

この道によく似た多くの情報がある。多くの覚者、多くの宗教、多くの言葉、よく似た同じ言葉。あなたが正法を、正伝の仏法を、殊に禅の悟りを求めるならば、それらが助けになることはない。

「お釈迦様から二千五百年伝わる禅の正しい法を通して、

此処に参じた人の中からこの道の継承者が現れた事は私も嬉しいです」

私を見性に導き、師家はそう言った。

本物はいる。学べる。理解を捨て、誠実に、馬鹿素直に、言われたままに、自らに学べば悟る。

それは覚者の沈黙、グルの恩寵、瞑想や観想によって齎される。エンライトメントの事ではない。無自己の体験でもなければ、パラパラマンの自覚に至るのでもなく、内面に向かうのでもない。

出家在家、持戒破戒、そのライフスタイルによって左右されるのでもない。

あなたが学問としての仏教や職業としての僧職、出家在家といった生活様式や宗教信仰に関わらず、その本質、悟り、見性、解脱の自由を切実に求めるなら、禅の正法、自らの身心だけで事足りる。

学者や自称覚者が言っているのではない。禅の精髓を継いだ者が言っているのである。

本物はいる。学べる。心配いらない。本物は道を知っている。指し示し、間違いを見抜く。

だが、あなたのことはあなたしかできない。誰も何もできはしない。他人の体験や御託は役に立たない。

本物はあなたに何かを強制する力を持たない。だが、あなたが道を求めるなら正しく導く力を持つ。神秘でも、靈性でもない、あなたと同じ目で、耳で、言葉で、所作で、ありふれた人間として導く。

この拙い著述を古仏、峴山哲玄老師に、そして切実に道を求める人の誠意に捧げたい。

・同じものなのだろうか

意識の中に自己を忘れること。

それは意識を失うことではない。

意識自体が純意識自体である時に自体が自体を知ることができない。
主体を主体とすることも出来ぬところに意識の主体すらも消滅する。

識自体が識以前の純然たる法性体の事実_ニに証せられて認識が及ばないことを得た時、
この時初めて「今」の事実である_ニこの生活自体が法身_ニであることを自得し自覚する。

この時、疑いようも信じようもなく、その必要も全くなく、その欲求すら起こらない。

求心が完全に止む。

これが正法における見性_ニの定義であり、解脱、大悟とも言われる。

いったいどうしたらよいのだろうか。

公案の透過、悟なき趺坐、数々の瞑想やあらゆる信仰行為によって解決するのだろうか。

多くの学術書、語録や文献、近現代の書籍、インドやチベット、神秘体験や超能力、靈感や神仏、
聖者やグル、儀式や戒律、呪いや運命学、常識や道徳、論理や科学、言葉や哲学、苦行や荒行 etc . .

結論から言えば、全く関係ない。

そもそも_ニ禪_ニとは、ヨーガやアドヴァイタ、ネオプラトニズムなどと同じものなのだろうか。

諸々のタントラ、キリスト教神秘主義やスーフィズム等の神秘主義と同じものなのだろうか。

大乘仏教、ヴェーダンタ、シャイヴィズムなどが融合した伝統や神秘哲学と同じものなのだろうか。

あらゆる宗教哲学は、相互に影響し合いながら形成されていった歴史を持つと言われる。

何人かの学者は_ニ禪_ニもそれらと同じ神秘主義だと言うが、果たして本当にそうだろうか。

何故それが同じものだと判るのだろうか。

或はジツドゥ・クリシュナムルティ、ラマナ・マハルシ、ニサルガダッタ・マハラジ、OSHO、
バーナデット・ロバーツ等、覚者_ニと言われる人達の何れかの主張や教えと同じものなのだろうか。

ゾクチェン、マハムドラー、サハジャ・ヤーナ、禪と同じような主張はいくらでもあるという。
似たような言葉や同じ言葉を使っている限り、それは同じものと見做して間違いないのだろうか。

結論から言えば、同じではない。

自らに正伝の仏法による見性の事実なきがゆえに、言葉を解釈して同じだと誤解するのである。共通する言葉が同意であるという希望を正当化し、安心しようとする以外すべがないからである。

目を閉じ、横になつてゐる時だった。
身体感覚も、存在しているという認識も、何も無いところで振動した。

何も無い自体が衝撃のような振動であり、それは命の根源であり、鳥の声だった。
何もわからないまま方法し、存在せず、命である活動体、それ以外何もなかった。

時間も、距離もなく、すべてがこれだった。それは死であり、死が命だった。

自我というものは、はじめから存在しなかった。

すべてはこの活動体、即ち^レ仏性^ノの自受容三昧、その無窮の因縁生滅が続いているだけだった。
この身心、この現れのすべては^レ仏性^ノの己が三昧であり、^レモノ自体^ノが^レモノ以前^ノだった。

只、今、この事実の実相とは、跡形のないその時々^ノ仏性^ノの時節でしかなかった。

今まで目に耳にしたすべての言葉は実際と乖離していた。言葉とは事実の形骸のことだった。
すべての公案は、発した問い自体が答えであり、それ自体で答え終わっているのだった。

それまでの認識が死に、この言語不及の事実を誰にも話す気がせず、説明する欲求も気力もなかった。
この身心がこの身心である事実を誰かに承認してもらふ必要はなく、誰も承認できる筈もなかった。

求めることがなくなり、迷いも疑いもなくなり、^レどうしたらよいか^ノということもなくなった。
膨大な量の書籍が、全く意味を失って姿を消した。特別興味が沸くようなものもなくなった。

ひと月ほど経ち、ある師家との縁が因となつてこの時節となつた事から、師家にだけは報告しようと思つた。
見性が真正でなければ少し話せばすぐにボロが出る。点検され試されたいし、確かめたいという思いが湧いた。

別にどう評価されても構わなかった。誰かの言葉によつて揺らぐことができないほど事実は確かなものだった。
「大悟」と言われればその通りに聞こえ「悟り損ね」と言われればその通りに聞こえるだけで同じことだった。

直接 師家に参じ、一対一で四時間半に亘り この事実を確証する機会に恵まれた。
それは貴重で過去に類例がないほど楽しく、学びも戒めもある素晴らしい時間だった。

自ら目の前に仏陀し、話し、笑い、同時に、それを見、聞き、笑い、跡形もなかった。

「お釈迦様から二千五百年伝わる禅の正しい法を通して、
此処に参じた人の中から この道の継承者が現れた事は私も嬉しいです」

このような言葉を掛けられることが、この人生に起きるとは夢にも思わなかった。

禅の精髓を継ぎ、修行に決着がついた。同時に幾つか書き残しておきたいという思いに駆られた。師家は無駄のない幾つかの言葉で私を見性に導き、死んだ認識に釘を刺す事で、死んだ事をも死なせた。

このような力を持つ師家が現代に存在したという事実の実態は、見性した事実によって初めて判るし、師家の力について触れているものはなく、その実態が知られないままであることは不本意に思えた。

「お互いこういう話をできる人が、世界に何人いるんですか」

師家の言葉に、得も言われぬ感慨が湧いた。

拙い著述をしようと思う旨、その場で師家から賛同と許可を得た。

言葉は、言えば言うほど、書けば書くほど、発した先から実際と乖離する。

どのみち何を書いても形骸と御託になるのは分かり切った上で、その形骸と御託を並べ散らし、僅かな人たちのきっかけとなる事を願い、後は誤解と批判に晒される事で報恩の手始めとしたい。

禅の現代において「悟」は死語になりつつあった。

禅の現代における見性悟道の実際は「五百年に一人の傑僧」と謳われた古仏、玄魯義衍によって蘇る。

師家は禅の現代における見性悟道の生き証人であり、玄魯禅師の正法の記録を残し、世に知らしめた。

自らも正法を継ぎ、大悟した。

師家とは、禅の精髓を蘇らせた玄魯義衍の嗣法、暁山哲玄その人である。

・武道

まずそもそも誰が本物なのかわからない。ある人物が「悟」を得ている事を確認するすべや目安は何もない。いや、本物に縁したとしても、自分のことは自分でしかないし、それ以前に何が本当なのかもわからない。

本当の仏法、本物との縁、そんな稀な僥倖は望めない。

師はいない。

自分でやるしかなかった。

様々な試行錯誤と体験を経て、認識以前の作用を武道で実証する事を思い立つに至った。
西江水、無住心、古来より武の極致は見性悟道をその根拠とする。

十代前半より諸々の格闘技や武術に親しみながら、その中に自分が求めるものを見出せなかった。

武道で、禪の真偽を試す。

自分で納得いくまでやる。

これ以上信用できる方法を思いつかなかった。

一人でどんな体験をしてみたところで認識沙汰でしかない。試された事がない者は信用できない。他人に試される事で、独り善がりになることを避けられるし、何か起れば自他共に確認できる。

まず、対人を用いる上で、その役割を将棋のように上手（うわて）と下手（したて）に分けた。

下手は認識を用い、試せる事は何でも試していく。上手はすべて、只管で応じるといったものだった。

こういったすべては、よく言われる、理に偏った、絵空事なのだろうか。

禪は精神論に過ぎないのか。

その実験には可能な限り、考えられる限り極限の厳しさを求め、怪我人も出た。安全を犠牲にしなければ真偽の確信に至らず、欺瞞の種を残す事になる。

熱心で協力的な信頼関係に基づく一切の手加減を許さない実験が可能になり、結果、当事者一同は、その認識と考え方を、置き去りにする必要に迫られた。

作用の実態が顕になった。

それは誰かの理解やコントロールによって行使できるような類のものではなく、明らか事実として当然のように再現され、同様に再現できなくなるものだった。

只管であるとき、上手には何ら特別な自覚はなく、対する下手は、様々な状況に陥る事が判って来た。意図が対象を失って自分に帰って来たり、或は、意図以前に既に入り込まれているような状態だった。

また、多人数による実験では、味方を道具で打ち付けたり、自分を突き刺したりする者もいた。

下手に起きる現象には個人差があり、人によって陥るパターンが決まっていた。

衝動性や、その速度といったものが、大いに影響している事も明らかだった。

著しいと始めから攻撃の意図を生じることが出来ず、意念を生じても消滅し、抵抗、反撃の拍子と意図を失い、無防備な状態で目前に迫られ、或は動かない相手に何もできず、動けば自滅的な状況に陥るといのが常だった。

また、只管による作用は、常に認識による作用を消すか素通りするかだった。

只管による作用を体験できなかったという者は一人もおらず、皆一緒にそういうものだという理解はできていた。しかし自分がやったという手応えがなく、どうやったのかもわからず、なぜそれが起きたのかもわからなかった。

何もしなかったからである。

偶発的過ぎて、どうすればその状態に戻れるのか、どうすればそれを維持できるのかもわからなかった。それを目指すと同離れ、既にそうなっているという事もなかった。もう戻れない気がするという者もいた。

あらゆる瞑想技法はこのシビアな実験の中で打ち砕かれた。

認識とは事実の後に生じるものであり、認識がこの認識以前の事実に触れることはできない。認識を用いない在り方に観念的理解から生じるあらゆる行為は到達することができなかった。

認識以前に機能と作用があるという事実は、当然、認識が志向する内容とは関係がない。

事後反応でしかない認識という過去が今の事実に関わる事はできず、何もやりようがなかった。下手（したて）にも自分がやられたという感覚はなく、何かを手渡されて受け取るような感覚だった。

また交通事故等、結果的に身の危機を未然に回避するなどの体験談も枚挙に暇がなかった。

幽体離脱を体験する者や、滝のような気が見えるという者、サマーデイに入り前後不覚になる者など、何れもそれ自体に意味を与えるには実験が厳しく、実際それは素通りされる。白昼夢でしかなかった。

ある時、心意識以前の意識の在りようを自覚した。覚者の多くはこれを重んじる。忘れては空調や周囲の音に傾聴し、聞こうとする前から聞こえている事実に着いた。

それがないと気絶、ブラック・アウトするという意味での意識、空間的、観照的なその在りように徹し、労働や日々の生活で注意していると、音はその沈黙からやって来て、音と聞くものが一つになっていた。

しかし、そう在る事が、上手を成立させているわけではなく、むしろ関係がないようだった。

上手の実際は起きるに任せ、何も差し挟まないというだけで、どうもこうもなかった。わからないまま動くに任せ、動かないに任せるだけだった。なるようになるのだった。

只管とは、生来である認識以前の活動体の姿だった。

だが、そのままではいられない。

どうかその原理を悟らねばならないという認識がそれを許さない。

それが正しいのは判る。だがこのままでいいのか。

正師がないというのは要するにこういう事だった。

証明して尚、それが正しいという裏付けが取れない。

今まで学んだ多くの言葉が事実への確信を妨げた。

それが妥当であれ、見当違いであれ、全ての言葉とは事実の形骸であり、その意味においては嘘だった。多くの愛着ある嘘が邪魔をし、同じところを行ったり来たりさせ、迷わせ、疑わせ、惑わせるのだった。

また、実験の中でもう一つ発見があった。

下手が相手だけに集中し、相手と一つに同化する事で主体を忘れると、上手と下手が逆転する。

対象と同化して一つとなり、自己を忘れて主客の認識が落ち、只管に至る。これは公案の原理でもある。

このような公案的下手は素質と誠意がなければ成立せず、悉く只管にまで至ることがない。

十七年間で、立ち合い中、下手から上手に、つまり公案から只管に至るのは一人だけだった。

だが、優れた下手は実験において、上手の真偽を見破る試金石だった。

上手が認識の介入によって居付き、停止した瞬間、上手が自分でその事に気づくより速く撃ち込む。

相手と一つになる事で自己を忘じ、自他の境が消える。撃ち込むという役割が、作用となって果たされる。相手は自分が事実から逸れ、認識の中に居たという事に撃たれて気づくが、それも分からない場合が多い。

認識を用いると、今の事実に取り残されて必ず止まる。その認識が事実と自らを分断し事実とぶつかる。上手は考えると動けず、今から逸れ、認識が介入した通りに撃ち込まれ、往々にして庇う所を撃たれる。

逆に上手が確かだと、下手は何も出来ず、自崩れし、その本物の作用に身をもって触れることができる。下手が崩れず、どちらも確かだと相上手になるが、何れにせよ立ち合いはお互いを点検する手段だった。

十数年に及ぶ紆余曲折と過酷な実験の中で明らかになったのは、認識以前に、認識外の作用があり、それは理に偏った絵空事ではなく、理偏を述べる者にはそれが判らなかつたのだという事だった。

ある時、玄魯禪師が木刀を持たされ、剣道家にその悟境を試された事があるという。

玄魯禪師は剣の事は何も知らないのに、何もわからないまま木刀を持って立っていた。

だが、十分、二十分と経過しても剣道家は撃ち込めず、遂に諦めて言った。

「隙が無い」

禅は絵空事ではない。

心理学でもなければ精神論でもなく、気でもなければ超能力でもなく、哲学でもなければ形而上学でもない。人間の認識が及ばない事実をそう片付けて安心し、認識を自我として用いることこそ、絵空事なのである。

機能、作用といった生命の活動が、認識によって起きているわけではないという、生き様の事実に触れたとき、認識と主観的価値や動機の全てが意味を失い、認識によって守られ、生きて来られたのではないことに気づく。

武道も、実験も、意味がなくなり、認識以前の只管の姿が、武の極致である事は間違いがなくなる。毎瞬二度と出来ない事をやりながら、何であれ起きることが起き、同じ次はなく、跡形も残らない。

道とは禅である。それは生活であり、そのままの生き様である。

そして浮き彫りになるのは、誰もが本当の事を知りたいわけではなく、殆どの人は、自分の投影したものを求めているだけだという事だった。

事実を受け容れられず、認識を満足させる都合の良い概念を求め、その虚偽を終わらせるつもりはない。だから事実に触れ、それが正しいという事を認めても、徹底することなく認識の範疇に留まるのである。

だがそれでいい。ただそうなのである。

・覚者の主張

武道による実験を始める前、死を賭す修行が必要なのだと思っていた。

身心を追い込むような命がけの厳しい修行をしなければ、悟れないという誤解は根深い。山での荒行は取るに足らない神秘体験と、荒行自体には意味がないという理解を齎した。

身体と精神を限界を超えて追い込み、強い意志で悟るなら、トライアスロンやマラソンをやればいい。アスリートは誰でも悟達するだろう。彼らは不屈だし、無にならないと消耗することまで弁えている。

難行苦行と称して自虐的な行為に及び、脳や身体機能を損ねるような真似をしたり、退化性の委縮を引き起こすような修行によって、麻痺した結果が悟りなのだろうか。

だが、ただ、坐っていればいいとか、難解な謎々を解けばいいとか、規則の厳しい生活を続けるとか、定められた生活様式と知的思索によって悟るなら、世界中の出家者の殆どは悟達していることになる。

覚者は観察者のいない観察、観照、見ることに、そこに展開する身体や事物との非二元性に言及する。意識や現象活動の根源に至った事を自認し、それを体験し、それになったという認識を持っている。

観察者がいようがいまいが、見ることに、残る限り認識と体験がある。

神秘主義としては正しい。

非体験をも、見ている、こと。認識し体験していること。既に在る、それになる、こと。それがなければ、覚者、という精神世界の特別な人々や巨匠は存在しないことになる。

だが、禅においては認識が残っているという時点で、既に典型的な、悟り損ね、であり、その理解を掴んでしまったら文字通り、神秘主義に墮すること以外の何もものでもない。

禅は神秘主義ではない。

禅という見性、それは認識体験の事ではない。

認識が止むから、方法に、事物に証されるのであり、そうでなければ認識の範疇となる。認識が死ぬとき、何もわからず、何もないとき、縁起し、自受容し、跡形もない活動体、

仏性という純粋な事実だけになる。

認識が蘇り、自覚する。

すべての、誤解、が終わる。

その究極の知識をも去ることを、大悟徹底とも聖胎長養とも言う。
この道の伝燈は、どのような悟りも掴まず、どのような悟りからも去る。

禅は論理的ではない。論理は理解を掴ませ、学ぶ者を認識に閉じ込める。役に立たないのである。
それは、どの概念に該当するか。に関係なく、何であれ、従来認識を用いる事の誤りを意味する。

精神を条件づけから解放して自由にするのも、自然な全的注意も、ただ在る事も、認識の仕方ではない。
視界空間をもって悟りの窓と称するのも、音を聞く主に傾注するのも、認識によって認識を得るに留まる。

認識を用いる限り、認識を見る。

それを現実として体験する。

死者と会話したり、キリスト像が泣いたりする。輪廻転生、過去生、来世、天国、地獄、守護霊、悪魔。
覚醒体験、幽体離脱、臨死体験、霊界、自我の喪失、ワンネス、真我や神、認識し得るあらゆる現象体験。

だが、これは想像火傷と変わらない。

実際に起きている現実は否定できないにも関わらず、意図の有無と無関係に、主観を反映しないものはない。
その現実をこさえている認識が見ているのは事実ではなく、脳が自動的に解釈し、限定した認識なのである。

頭在意識、潜在意識、個人的無意識、集合的無意識と呼ばれるものは、認識のグラデーションと言っている。
意識の上に投影された認識を認識する事で、次々現実を確定しながら体験する際限のない固定観念でもある。

認識が、否、観察が残る限り、主観を反映する。

量子力学に於ける、二重スリット実験を引き合いに出す者もいる。
主体と客体を分けることはできない事を、量子物理学は示唆する。

意識が生じる事を、何が決定しているのかは、相対的には判明しない。
それは観察がなく、それ自体としてある時のみ、矛盾なく確定している。

決定、意識、事物は三位一体、無自性空、因果同時、即滅、相続の絶対、自受容三昧底。

故に、決定の背後に何かという実体を持たない。

決定、意識、事物とは、身心の事なのである。

認識を用いる事がないと、何も知らないまま機能し、作用する事物としての身心だけになる。
身心だけになり切る。観察と観察対象という相対認識が止み、観察自体が止むと事物も止む。

人もモノもなくなる。

身心が純身心自体である時、自体が自体を知る事はできない。
主体を主体と知ることも出来ぬところに意識の主体すらも消滅する。

識自体が識以前の純然たる法性体の事実_ニに証せられて認識が及ばないことを得た時、
この時初めて「今」の事実である。この生活自体が法身_ニであることを自得し自覚する。

精神世界は認識_ニの中にしかない。

逆なのである。

気も念も超能力も只管である。事実_ニに素通りされ、運命学のすべてはその妥当性を事実_ニに依存している。
瞑想も神秘主義も、事実_ニからの逃避であり、宗教哲学や語録、言葉と関わる事は事実_ニからの乖離だった。
事実_ニだけにする。

この驚くべき絶望的な教え。

人間の考えではない、人間の考えに基づかない、認識の範疇ではない唯一の教え。
すべてをやめ、すべてを捨てたときに残される、この身心にのみ学べという教え。

認識の範疇にある理想、期待、言葉、解釈、投影、行為、体験、試行錯誤と、真逆_ニの教え。

それは、人間が作ったのではない生命の実相であるが故に、絶える事なく伝わってきた。
一人として漏れる事なく、間違えようのない、あまりにも確かな道として伝わってきた。

認識は認識から一步も出られない。認識の虚偽を終わらせるのは認識体験や理解ではない。
一切の認識体験が止むとき、この身心がそのまま法身である事を、法が、事物が証明する。

故に、どれほど同じような主張や言葉を用い、全く同じ事に言及しているように見えても、
事物によって事物の真相が証された。という覚者は一人もない。必ず、認識体験を語る。

重要なのは絶対の観照であり、事物は、身心は、表層的で本質的な問題ではないと語る。
見ることは、根源であり、自我が消え、精神はそれになったという体験主体でもある。

認識が認識内で新たな認識を得る。

万物や意識の根源に触れ、それになった体験主体としての認識なくして覚者の主張は成り立たない。
だが認識が残る限り、それは体験主体であり続け、止む事はなく、見ることは、自体が根源でもある。

自我が消滅し、自己も消滅したという体験主体こそ、それ自身を実存と誤認した認識なのである。

自我など始めからない。

なぜ覚者の言葉は私を導くことがなかったのだろうか。

真剣さと誠実さが足りず、理解力が足りず、過去生の功德が足りなかったからだろうか。魂や心霊、靈性や靈的造詣、神秘や秘教的理解に対する感受性が足りないからだろうか。

そうかもしれない。

だが、最大の理由は、それが私の事実ではないからである。

どの覚者が、これがあなたの事実なのだと言おうとも、それは私の事実ではない。

正法とは、それは私の事実ではないと否定することができないから正法なのである。

自らの事実の他に 自らの事実はない。

事実にしかならぬ事実の実相を証する事はできない。

故に 正法の他に正法はない。

それは 精神世界の事ではなく、誰も否定できない同じ事実に基づく。

故に 積尊の悟りも、祖師の悟りも、誰の悟りも、全く同じ悟りとなる。

他に何も出る幕は無い。

・事実

眼耳鼻舌身意、六根と言う。機能に問題が無ければその事実が、問題があればあるなりの事実がある。眼に物、耳に音、鼻に匂い、舌に味、身に感触、意に思考、自らの事実とは、この今この様子である。

この身心の活動である六根の働き、その事実は今、ここであり、どこへ行こうが、今、ここである。

聞こうとしなくても、音がすれば聞こえる。手を叩く音がし、それを認識した時には音は消滅している。耳自体は何も知らない。聞こうとも、聞こえているとも思わず、準備なく、聞き分け、選り好みもない。

この必然の作用を心、空、縁起、因果、修証、無常、無我、無自性と呼び、この活動体を仏性と呼ぶ。

全て無常、無我、無自性であるから、「バンッ！」とデカイ音がすれば、誰でもその通り聞こえる。何を考え、悩み、迷い、悲しみ、思っているても、「真っ赤」な色に会えば誰でもその通りに見える。

突然ぶつ叩かれただけでも、考え事から解脱してしまう。救われている。

それを祖師や師家が示し、解脱させ、救って見せているのに気づかない。

驚いた瞬間、一瞬前の迷いやら悩みやらは何処へ行ったのか。その驚きすら既がない。

・因縁生滅

この事実を示すために、老古伝、玄魯禪師は、「音がする」ではなく「音がある」とした。

実際には、音がすると聞くのと消滅するのは同時であり、その様子は分けられずにある。音がする、それから聞く、聞いた音は今はない、手拍子だった、というのは考え方である。

その刹那、そうある。それは同時に滅であり、跡形も残らない。

解脱体。

一瞬前はもうない。

今の様子とはすべてそうになっている。

認識を用いず、認識以前の事実に触れているというのは、一体どういう事なのか。六根の機能だけに打ち任せられた事実の様相とはどのようなものとしてあるのか。

それが判らなければ、只管が判らない。

只管という概念以前の、既にそうである事実を体認できない。

そのままにするのではなく、そのままとはどういう事か。

「バンツ！」玄魯禪師が手を叩く。

この老古仏が言わんとしている事を要約すれば、これが生命の根源だという事に尽きる。直接参じる事ができたなら、或は「音がある」を超えた力を示してくれたのかもしれない。

だが、玄魯禪師は遷化され、それはもう叶わない。

その語録に触れ、理解することができても、理解は必ずくすぶる。

直接尋ねる事ができたとしたら、玄魯禪師はどう示してくれたのだろうか。

バンツ！と、テーブルを叩き、暁山禪師は言った。

「これを・・・」

バンツ！

「音とか・・・」

バンツ！

「音がある、とか言うけど、実際には・・・」

バンツ！

「このさなかでは・・・」

バンツ！

「音ですらありませんよねえ」

（これは）と思った。

何を言っているのかわかった。

事実を示す力が、「音がある」を超えている。

（本物だ）そう思った。

理解の息の根が止まり、私がふと「何もやりようがない・・・」と呟くと、暁山禪師は言った。

「そう、やりようがないんですよ、皆それが理解できない」

号は暁山、名は哲玄、俗姓は井上。暁山は（ぎょうざん）と読む。昭和八年四月十六日、「五百年に一人の傑僧」と謳われ「老古仏」とまで呼ばれた。玄魯義衍の長男として浜松に生まれた。

時は第二次大戦前後、生まれ育った龍泉寺は貧しい山寺だった。

玄魯禪師は僧侶としての出世や寺の経営には全く興味がなく、接化に専念した事もあり、戦後環境も相俟って寺は困窮を極めた。

昭和二十一年六月二日、五人の子を残し、四十歳の若さで母が亡くなる。十三歳の時だった。

十五歳の時、妙巖寺専門僧堂に安居したが、戦後食糧難の中、極度の栄養失調に陥り落命の危機に瀕した。

回復に半年を要し、十六歳から十年間、発心寺専門僧堂に安居、十八歳で原田祖岳老師が見性を認めるも、自ら肯わず、認めなかった。帰省の折々に父、玄魯義衍老師の指導に接し、修行の在りようを知るに至る。

後に大本山總持寺本山僧堂に安居すること五年、永江金栄老師、鷲見透玄老師に参じ、帰省中は父であり師匠である玄魯禪師の接化を助け、三十歳で龍泉寺住職となり妻帯した。

玄魯禪師の常接心を支えながら大本山總持寺本山僧堂の参禅会主任を務め、余語翠巖老師の元で一般参禅者と起居を共にし、その指導にあたった。

五十歳を目前にし、年末年始の準備と連日の境内掃除を終えて休息していた時、雨音で見性大悟した。龍泉寺を自存できるまでに建て直し、伽藍を整え、禅堂を建立し、禅道場としての今日を築き上げた。

同時に大本山總持寺祖院後堂として二年間修行僧の指導にあたった。

後に、より自由な立場で接化できるよう住職を引退し、「悟」を求める人々を指導する事に専念して来た。

最も知られるのは、玄魯義衍という本物の記録を出版物として残し、世に知らしめた事である。見性とは何か、悟とは何か、正法とは何か、玄魯義衍老師がその生涯を賭けて語り尽くした。

史上最高峰の力を示し、現代語で、的確に、端的に、正法眼蔵を悟で翻訳してみせる事ができた。禅の精髓の全てが残された。その記録から、見性悟道の正しい理解を得る事ができるようになった。

これらは暁山禪師の略歴と功績として知られる内容であるが、師家としては常に玄魯禪師の黒子に徹し、縁の下の力持ちで在り続け、自らに関する著述などはなく、その力については殆ど触れられていない。

玄魯禪師に参じていた人が、玄魯禪師遷化後、暁山禪師に参じて開悟し、

「暁山禪師の話を聴く事は、玄魯禪師の話を聴く事と同じ」と評したという。

異論はない。

だが、敢えて付け加えたい。

「或いは、それ以上かもしれない」

現代語で、端的に、正法の正しい理解を得る事ができるようになった。

しかし、既にそうになっているという事実を体認する必要がある。認識ではない事実を悟る必要がある。本当にそうになっているという事を、自らが悟らなければ修行は始まり、認識から抜け出す事がない。

手付かずの事実を悟るまでは正師が必要となる。我流の正法は存在しないからである。

真正の師家の力_カは、学ぶ側の認識が挿んでいるものを奪い去る作用として示される。

それは、事実_カに導く力_カのことであり、認識を得ることを助長する力_カではない。

だが、人は自らの認識の巧偽を助長する新たな認識を得ることを求めている。故に何十年と真正の師家に縁していても、その力_カに気づくことができない。

求める方向が間違っているのである。

間違った方向へ導くという意味では、真正の師家ほど無力である。

偉大な師に弟子の礼を取り、精進を競う決意を示しても、それだけでどうにかなる事は何も無い。

形式に満足を見出す者ほど見込みがないのは、一休禪師に学ばずとも今に始まった事ではない。

形式や承認は何もしてくれない。

正師が手伝えるのは常に只管_カまでである。

見性の時節とその実際は、仏性_カそれ自身による無師独悟である。

師弟などない。

すべての仏陀はただの人である。

偉大な師家が人を導き、人が見性したとき、偉大な師家は何ら特別ではない、ただの人になる。

積尊も、祖師も、我が偉大な師家も、自らと何らそう変わりはない、ただの人に成り下がる。

だから偉大なのである。だから途方もなく貴いのである。

偉大な師に納まろうとする正師はいない。それを望む正師もいない。

偉大な師は、そんなものは存在しないという事を、あなたに示したい。

諸法の実相とは、悉有_カ仏性_カである事を、全ての存在がそうであるように、あなたも、そのまま、唯我独尊の法身である事を、あなたに示したい。

特別な存在などない。

活仏が自らをただの人に貶める偉大さは人間業ではない。

それが体認されたとき、ただの人にまで成り下がった目の前の仏陀の偉大さがわかる。もう、どうしていいかわからないほど、その存在と力ちからの偉大さを思い知る事になる。

ただの人である仏陀の貴さを、ただの人であるが故の貴さを、思い知る事になる。

しかも、それは同時にあなたなのである。

仏道家としての生活様式や礼儀作法、学識を学び、修める事は誰にでもできる。一つの生き方であるし、その形式を学ぶ上での師弟関係というものも当然ある。

だが、それが修行の眼目ならば、精巧な張りぼてや金メッキと何も変わらない。

そんな上っ面に、正法の正師は必要ない。

正師と関り、こういう修行をしていれば、いつか悟るだろうと思う者が悟る日は来ない。十年後、二十年後には、師家のように悟るだろうという認識を持つ者が悟る日は来ない。

正法における真正の師と縁するのは、稀を通り越した僥倖と言っていい。

だが、縁しただけで悟れるわけではない。

その力ちからに触れ、その力ちからを引き出す条件は、すべて学ぶ側にある。

真正の師だけが正法に導き、真正の誠意まことだけが正法に導かれる。

悟りを借りる事はできない。あなたの事実は、あなたしか確かめられない。

正師が力ちからを使うつかうとはどういう事か。

あなたが使うつかうのである。

道は、すべて学ぶ側にある。

認識が介入し続ける限り坐禅にならないし、手付かずの事実がわからない。言葉を解釈して認識の更新を繰り返すのではなく、認識を置き去りにする。

何十年と跌坐するも、坐禅になつてないなら意味がない。

本当に学ぶ事ができたら、もうそれが只管なのである。

それが生活の全てに行き届いて揺らが無いのを坐禅と言う。

とめどもなく揺らぐのは考えであつて、事実ではない。事実は揺らないし、迷えない。揺らぐようなものと関わったり、持ったりするのをやめれば揺らない事実だけになる。

言葉に騙されているのである。間違つた考えを信じているのである。

考えに基づいて、目の前の事をきっちりやる、というのは坐禅ではない。

武道の立ち合いで、考えに基づいて、きっちり技を使おうとすれば、ぶちのめされる。頭の中の記憶理解を、事実を無視して自分の思い通りに行使しようとするからである。

相手が迎合しているか、暗示にかかつてないと通用しない。

今という事実は、それ自体が因縁生滅の連続であつて、

心の準備とか自分のペースとかが入り込む余地がない。

認識と関係がないのである。

見ようと思う前に見終わっている。聞こうと思う前に聞き終わっている。動こうと思う前に動き終わっている。一瞬前に終わった事が認識され、理解される。理解を行使しようとする事は、永遠の後出しジャンケンになる。

因縁生滅とは、何も知らないものが、何も知らないまま活動する姿であり、その中に、知り、理解する事が含まれ、滅する事で新たに知り、理解する。

知る、という事は、後から後から無窮の更新を繰り返す代謝運動のようなものであり、何も知らない活動の垢でしかないという事が見えないと、拘泥して使い物にならない。

事実は何も知らないまま全てを使う。

今、ここで、何も知らないまま、全てが同時生滅する無窮の新しさから逃げない。事実は今、ここであり、どこへ行こうが、今、ここである。元より逃げ場はない。

他に学ぶ場所はない。

禪を追求し始めたのは2002年、武道による実験を始めたのは2005年だった。

当初、臨済曹洞兼学の小さな宗教法人である在家禪の道場に行ってみた。人を疎外するような師家の態度と反応を見て（これは駄目だ）と思った。

スキンヘッドに法衣袈裟のコスプレをして、禪師の真似がしたい輩の相手などできるものではない。これも、自分でやるしかないという判断のきっかけになり人に頼る事はできないという現実だった。

2006年、曹洞宗の有名な師家が近所に来るといので参じた。

認知症の父が、閉塞性動脈硬化で両足を切断して間もない時だった。

「起きる事を瞬間瞬間に躊躇なく受け容れている力」という見解を述べた。

「一体何年、どれほど禪の修行をされたのか」とその師家は言った。

「月を見たら、もう月を指す指と関わってはいけない」とも言った。

そのまま行けという事だった。

後に、この頃の見解は、暁山禪師によってあっさり否定される。

「これは違いますねえ、躊躇なく受け容れる主体が残ってるでしょう」

あの頃の自分に聞かせてやりたいものである。

2007年10月、自受容の事実を見た。自受容の事実を体験し見ていた。

悟り損ねたのである。

2014年、チベット密教で言う楽空無別を絵に描いたように体験した。

それを実践しようとしたのではなく、坐っていたら偶然そうなったのである。

（これが何になるんだろう）と思った。こういうのは本当に意味がなかった。

2015年2月、心意識以前の意識の在りようを自覚した。

自分には何もできないという意味が判り、以後、自受容に触れはするも認識が残る。

2022年2月、知識も体験も飽和状態だった。

自分の認識など当てにならないし、できる事もなく、もうやることもない。お手上げだった。

そんな中、玄魯義術老師の存在を知った。

『義術語録』を入手する手続きが上手く行かず、どうしたらよいか問い合わせたのがきっかけで、『義術語録』より先に、つまり玄魯義術老師より先に、暁山哲玄老師と直接、縁する事になった。

師がいない事、もう何も期待してはいない事、結局一人でやるしかない事の理解を伝えた。しかし正師に学ぶ事ができていたら、少しは違っていたのだろうかという思いを吐露した。

暁山禪師は、結局一人でやるしかないという事に同意し、師がいない事については、

「悟ってしまえば、そんなこと関係ないんだから」

と言って私を励まし、むしろ間違いを学ぶよりいいと言ってくれた。

そして、私の状況と知識と体験のすべてに対し、暁山禪師は言った。

「観察が残るでしょう」

一つ、認識の首を跳ねられた。

認識の範疇にある体験、新たな認識、そんなアトラクションに用はない。

『観察者』は無論、『観察』が残る時点で違う。認識が手付かずで残っている。

見た、至った、達した、行ってきた、なる、ある、なった、すでにそれ、それが在る。

そこに触れた者だけがそれになる、という、神秘主義の主張の全てが認識体験にある。

全て違う。

私は精神世界の覚者になりたいのではない。認識が残る限り、見性はない。

いい歳になった。ケリをつけなければこの人生は全く無駄だった事になる。

今、悟れなければ、いつ、なぜ、悟れるというのだろうか。

悟りは『今』であるという。

同じ瞬間は二度と来ない。

この機会を逃し、今日、明日にも死ぬかもしれない。

『いつか』という日はこの歳に至るまで遂に来なかった。

来るわけがない。

臨濟禪を極め、日本中の宗師家を巡り、尚、自らの悟境に疑問を抱いて玄魯義衍老師に参じ、問答まくしたてるも太刀打ち出来ず、公案修行の全く無駄なる事を痛烈に思い知るに至って、^いそれまでの全てを捨てる^と誓って弟子の礼をとった青野敬宗老師は、玄魯禪師に宣言した。

「その代わり、一ヶ月で悟れなかったら死にます」

悟りは^今であるという。

十年後、二十年後、^{いつか}で、あろう筈がない。

正法を学び、正法の中に死ぬ。今、ここで、認識に死に切る。

そのための正しい理解を得ているだろうか。

暁山禪師は言った。

「言ってる事は正しいんだけど解釈してますねえ、違いますね」

また一つ、認識の首を跳ねられた。

後日、何も知らないまま、すべては起きていた。

その見解に、暁山禪師は言った。

「只々、時々刻々、^今、仰る通り、やりようはありません」

・聞き置きます

言ってみれば、これだけのやりとりで認識は半殺しにされた。

出て来たのは、反発と愚痴、認識理解の悪足掻きだった。

ただでさえ真摯に求める者は少ない。悟ったところで誰がそれを信じるのだろうか。必要とするのであろうか。人は求めてはいない。自分の認識が投影するものと違う事実の核心に迫るほど、興味を失い拒絶するではないか。

いや、人様の事はよい。承認欲求もない。誰が信じる必要もないのだが、もう教える事には辟易している。所属欲求もない。自分が孤立無縁で、どこまでいっても余所者でありアウトサイダーなのはわかっている。

多くの知識と言葉に騙されて来た。それらが全く関係ない事実が、認識の拠り所を全て奪った。

三日に及ぶ認識沙汰に対し、暁山禅師は敢えてコメントしなかった。もし何かを言われていたら、それは更に続くに違いなかった。

言葉が邪魔だった。

ここに師家の力があつた。

何も言わない。

言葉に振り回され、もがいているからである。

見限られたのだろうと思ひ、失礼を詫びて一連の指摘に礼を述べ、もう独立独歩で行こうと思つた。今までもそうだったのだから、最後までそれでいい。師も御託の相手をさせられるのは迷惑である。

(禅にも縁がないのだ)

アルコール中毒の父親と、見境なく人を罵るだけの母親による、身体と言葉の暴力に曝されて育つた。十二歳の時に両親が離婚し、父方に身を寄せた。父は遠洋漁業で年に一ヶ月ほどしか家にいなかった。

父方の祖母が食事や洗濯の面倒を見てくれたが、ほぼ一人暮らしとなった。解放された良い日々だった。栄養失調気味で小さく痩せ細つた身体は体力がなく、上級生によく殴られ、よく所有物を奪い取られた。

十五歳で社会に出て、十九歳で上京して以来、帰る田舎はない。祖母も父も疾うの昔に死んだ。

ふと、そんな生い立ちを思い出した。

独りでやる。それでいい。もう言葉と関わりたくない。

少し離れたベッドの上で、愛犬がビクッ！と動くのと、完全に一体であることを認識していた。連絡し、連日の認識沙汰を詫び、直近の様子を告げ、指示を求めずこのまま行きますと告げた。

暁山禅師は言った。

「今日もお喋り 聞き置きます」

古仏は一言で私の杞憂を優しく包み込み、同時に認識を首の皮一枚にまで奪い去った。

暁山禅師の一連の指摘は、武道で散々実験してきた。只管が至道である事を確信させた。私は認識が死ぬまで、只管を生きる決意を伝え、それが起きるまで連絡を断つ事にした。

見性はその三日後だった。

七月二十日の午前中、十一時前だったと記憶している。

暁山禅師と縁して五ヶ月後のことだった。

無駄なく、最小限の言葉で、当意即妙なまでに、認識を奪い去る力を、使う。お茶を淹れ、飲み、人の話を聞くような自然さと静かさで、概念を破壊する。

暁山禅師の道場生活は十五年に及ぶ。多くの師家の指導の仕方を見て来た。

言わなくてもいいと思う事、結論に至るまでの間の言葉が足りないと思う事、それでは伝わらないと思う事を目の当たりにしながら、自らの言動を淘汰していき、過不足ない、鍛えの入った力として、使うようになった。

この筋金入りの師家は、平語しか使わず、大悟をも去り、悟りの匂いは一切しない。

大袈裟なところは微塵もなく、まるでそれはとても簡単な事だと言っているようだった。

そして常に新しい。

悟を得た真正の師家に縁する最大の強みは、正解について考える必要がない事にある。何が本当なのかを探す必要がない。正解がある。解釈せず、言われたままにすれば悟る。

自分の気が済むか済まないかは関係ない。

言われたまま本当にやることである。

誰かのいいなりになれ、と言っているのではない。

この道には誰かのいいなりになるという事はない。

ならば何故、言われたままである必要があるのか。そこに自己の正しい学び方があるからである。あなたがそのままのあなたである事、それは誰のいいなりにもならないということの意味する。

師家に言われたままであればあるほど、誰のいいなりにもならないのが正法である。

誰のいいなりにもならないために必要なのは、言われたまま本当にやることである。

師家はあなたを自由にすることにしか興味がない。

師家はあなたが既に自由であることを悟らせた。

導く、救う、ただ、そのために鍛え抜かれた力がある。

なぜその偉大な力を、師家と一つになって使わないのか。

自分という考え、その認識こそ、いいなりの塊なのである。

そんなものといつまでも拘ってはいけない。

・悟るとどうなるのか

悟るとどうなるのか。

聞いてわかるくらいなら悟る必要はない。

だが馬鹿が利口になったり、愚か者が賢くなったりはしない。

馬鹿な者ほど利口ぶるし、愚か者ほど賢く立ち回ろうとする。

悟るとそれがなくなる。そんな必要がない事がはっきりする。

あらゆる事にしか生きられなくなる。

馬鹿は愚かしいし、愚か者は醜い。

馬鹿である事を、愚かである事を隠そうとするからである。

馬鹿は馬鹿のままがいい。

仏性が馬鹿するとき、隠すことはできない。

間髪もなく、大馬鹿する。

馬鹿は愚かしいが、大馬鹿は美しい。

利口者には真似できない生き方が、言葉にならない美しさでまかり通る。

まるで桜は桜として、梅は梅としてまかり通るように、

摂理とも、自然とも言えるような無碍の力でまかり通る。

馬鹿だなど思う。できないなと思う。だが、泣きたくなるほど美しい。

触れてしまったら、それが間違っているとは誰も言えない真実がある。

愚か者は醜いが、大愚者は美しい。良寛禅師を待つまでもない。

悟ると其々が各々の特徴そのままに唯一無二の美しさを自由に生きる。

何にせよ、それはそれになる。それとしてまかり通る。

あなたはあなたになる。それを避ける必要はなくなる。

感情も、考えも、あらゆる感受性も失われず機能する。

何も変わらず、むしろ、人は痛々しいほど、人になる。

だが、同時にそれらは解脱している。

滅の体であるが故に滞らず、常に新しい。

その、只管、を生きる姿は不思議なほど美しい。

悟る。

悟りを去る。

仏性が剥き出しで生きる姿をもって、初めて、悟りなどない」と宣言できる。

悟りの匂いが消える。

そこには誰かが解釈し、想像しているような小細工はない。

今、ここ、これ、この滅の美に、そんな呑気な細工はない。

それは赤裸々な生き様の美しさであり、仏性のあらわな姿である。

それは作為ではない。

故に、自らの美に気づかない。

自らの美に気づかないのが、美しさである。

愛は自らが愛である事に、慈悲は自らが慈悲である事に気づかない。

自らが智慧であり、悟であることを知らないのが、悟りである。

悟りを知ると、悟りは違う。

認識が死んで生まれ変わり、その生まれ変わった認識すら去るに及んで「悟はない」のである。

禅も、見性もない。そんなものに拘泥するから悟り臭さが抜けないのである。

大層な言葉で大袈裟にするが、本当は何も難しくするようなものじゃない。

本当はなんにもいらないのである。

本当はなんにもいらぬのが正法であり、即ち禅とは禅ではない。

そんな言葉のことではない。

暁山禅師と縁したばかりの頃だった。

メールで私の窮状を知ると、暁山禅師はすぐに電話をくれた。

見ず知らずの私に、電話料金を支出して親身に要点を説いた。

突然の僥倖だった。

禅の匂いも、悟りの匂いも一切しなかった。

この驚きと感謝をどう伝えていいかわからなかった。電話口で、その感謝と申し訳なさを辛うじて伝えた。

暁山禅師は笑い、嬉しそうに言った。

「このために生きてますから」

忘れられない。

こんな人が、本当にいるのかと思った。

参禅しろとか、跏坐しろとか、何かをしろとかいう事は一切なかった。

「是非一度、直接お会いしたいですね」とだけ言ってくれた。

生まれて初めて、生きた本物の^{まじ}禅に触れた。

^{まじ}禅という言葉ではなく、その実際の体に触れた。

この悟道の人は、十八歳にして原田祖岳老師に見性大悟を認めながら肯えず、認めなかった。

認めなかったのである。形式や承認を求めたのではなかった。

その後、見性までの道のりは長く、容易なものではなかった。

この人は誰よりも知っているのである。

^{まじ}悟を真摯に求める者の苦悩も、孤独も、不安も、迷疑も、だからこそ必ず悟ることも。

だが住職を引退して長い。

「食えてるから、いいかなと思って」

目の前でそう言って笑う美しさを、どう形容していいか私にはわからない。

「自受容三昧なんて上手いこと言いますよねえ」

などと言って暁山禅師を笑わせたが、実際、空とか縁起、因縁生滅といった具合に、単語や四字熟語のような上手いフレーズを超えて言葉を加えると、蛇足的に感じる。

しかし、言語表現の限度だからといって、単語や四字熟語のようなフレーズだけで人に理解ないし情報を与える事はできないし、そんなものを羅列しても意味がない。

かといって、「それなんぞ、云え、云え」などと迫られ、目の前のもの手あたり次第に用いて応じ、挙動で遮られた瞬間、ぶん殴り、「偉大な仏陀の老婆心」こんなやりとりの著述は役に立つだろうか。

或は全て端折って、とにかく座ればいいと言えば、なるほどその通りだ、などと思うのだろうか。実際これを地で行く人は参禅者に多いと思う。独参し、とにかく座る。皆それで悟れただろうか。

師家や方法に依存している人は多い。

師家や方法が悟らせてくれると思っているのである。

この人たちは身心だけでしかないという事を理解していない。
正法を何らかの瞑想や精神修養と混同してる事に気づいてない。

身心だけでしかないと悟れば、今、この事実だけになる。
それが見性への入り口であり、道であり、悟後でもある。

只管を誤解せず、どう悟るか。

漠然と只管のイメージを心掛けるというのは誤解の最高峰である。
「坐っている時は上手くいってる」なんていうのはその典型である。

まず、あなたが僧侶でないならば、僧侶の真似事は役に立たない。

僧侶という職業の人々にとって、道場や僧堂といった場所は職場であり、作務や跏坐も仕事であり生活である。
安居、接心という事も、ごく日常の中に溶け込んだ自然な風景であろうし、自己に親しむ機会でもあるだろう。

これは僧侶の生活様式における、自然な自己の学び方である。

あなたにとって自然な自己の学び方ではない。

僧侶に言わせれば、これが最も優れた生活様式であり、自分達はその専門集団である。
僧侶とは悟を得る為に特化した職業であり、導く事においても右に出るものはない。

だが、僧侶は悟っているだろうか。

僧侶が悟っているなんて、ごく一部、極めて異例な例外を除いて古今聞いた事が無い。現に今、尚、玄魯義術の系譜を除いて、どこへ行けば悟った僧侶に会えるのだろうか。

僧侶が悟る、というのは、一般人が悟る、というのと同じくらい異例なのである。

参禅や接心は、学び方を学ぶ、機会以外の何ものでもない。

しかし、日々、時々刻々、四六時中がその機会なのである。

接心に参加し「一般人がこれほど自己に親しむ機会はないだろうから」などと言われ、自分にとってイレギュラーな状況に価値を見出すなんていうのは馬鹿げた発想である。

只管を悟れば、今、直ちに、そのままがそれなのである。

僧侶の真似をして自然を修正しようとする事ではない。

実際には僧侶という職業にも、その生活様式にも、アドバンテージは何もないのである。坐る事自体に至上の価値を認めるならば坐禅は生活になり得ず、跌坐という信仰になる。

打坐と言っているのではない。只管打坐と言っているのである。

自分本位に解釈するのではなく、只管を理解し、悟るのである。

師家に「求めない」と言われ、求めないでいればどうなるのだろうか。

あなたはいつまでも求めないを求めているのではないだろうか。

「求めない」

本当は、そんな事、できないのではないだろうか。

なのにそれができると誤解し、漠然と求めないをやっているのではないだろうか。

求めない、とは只管の事であり、そのままという事であり、なにもしないという事である。

つまり、できないのではないだろうか。

求めないという認識理解をもって座る、これは正しいだろうか。

師家は、そのものずばりを示しているのであって、そのような認識を持つてと言っているのではない。それを認識理解にしまったら、誰のどのような言葉も嘘になり、あなたを正しく導く事はない。

どうか、ここを勘所を捉えて欲しい。

「求めない」という事を実践するのではない。事実は何も求めていないのである。あなたの事実が、その事実を師家という姿で、「求めない」と示したのである。

解釈してしまったら台無しどころか、認識の肥やしになってしまう。

あなたは予め「求めない」という言明を期待し求めていただろうか。

あなたは何も求めないまま、「求めない」という声を聞いたのが事実ではないだろうか。その声は、示す、聞く、滅す、同時に、求めないまま使われていたのではないだろうか。

師家は知識を与えているのではなく、「只管」である事実を示しているのである。

だから、あなたも只管でなければならぬ。それが唯一の学び方だからである。しかもそれは、今、もう、できている。できない人も、できていない人もいない。

「求めない」

それはあなたの事実ではないだろうか。

求めずして聞こえ、求めずして見えているのが身心の事実ではないだろうか。

だが認識に夢中で気づかず、「只管」の事実を無視しているのではないだろうか。

内に何も思わず、外諸縁を捨て、何もしない、と聞けば、そうするのだと思ってしまう。それは何らかの状態に向かう技法知識ではなく、そうなっている事実を示したのである。

そういう理解を持って、その理解を行使しろと言っているのではない。

「只管の真似」をやめないからできないということが判らないのである。

言われたまま本当にやる。

本当にそうなっている事実を確証する。徹しようとする前に、もう徹している事実を体認する。その働きは人間の手に負えるようなものじゃない事を、認識には何もできないという事を悟る。

そうすれば何も知らないまま、知るだろう。

禅の意味不明な問答は、言葉に引っ掛からないかどうかを確かめているだけである。

認識が介入すると言葉に引っ掛かる。音を解釈し始める。

事実を解釈している間に認識は事実置き去りにされる。

要点を逃し、落機に気づかず、もう跡形もないものに、いつまでも囚われるのである。

・得度

私は儀礼的な事に大変疎く、暁山禅師に「弟子の礼を取るってどういう事ですか？」などと聞く始末で、それがいわゆる得度の事であるとようやく理解したのだが、形式的決意表明の意味合いが強いと知った。

得度とは、精進を競い、悟り、伝えていくという決意を誓う行為であるという。

出家という制度が法律で認められず、俗性を捨てる事ができなくなって久しい。

だが悟道の人がそれでも出家の体を取り、名号を名乗るのは得度の誓いを地で行くからである。剃髪し、法衣を纏い、袈裟を掛けるのは、師の、祖師の、釈尊の生き方を敬慕するからである。

今ではあまり使われなくなった「禅師」という尊称と、出家の証しである号を、敢えて使いたい。

これは禅の精髓を極めた「僧侶」という生き方に対する、私のささやかな尊崇の思いとしてある。

見性大悟した「僧侶」だけが、禅師と呼ばれるに相応しい。

精進、大悟、伝導、「僧侶」以外の見性は、殊に伝導から自由だからである。

僧侶でないなら、生き様を示すだけでいい。どんな枠にも嵌る必要はない。

だが、その自由は伝導によって齎されたものである。

故に「僧侶」が枠に嵌らなければ「僧侶」を超え、俗人が伝導するなら俗人を超える。

僧俗などない。

それは、ライフスタイルを区別する上での、実体のない言葉でしかない。白い服を着るか、黒い服を着るかは、個々それぞれの状況や嗜好である。

あまりにも普通で親しみやすく、何の変哲もない姿で「古仏」が微笑む。

その「只管」の姿で、聞き取りづらい事や、分かりづらい事を言われると、

「えっ？」

などと当たり前前のリアクションを見せ、時折、静かに甘いお菓子を食べたりする。

何かになるまでもない。

僧も、俗も、師も、弟子も、あなたの姿なのである。

どうせ悟ればあなたは好きにする。

暁山禪師は、貧しい古道場に生まれた。

この家は、知る人ぞ知る古道場として求道者に知られ、常接心の大叢林とまで呼ばれることになる。

十三歳の時、母を失った。

弟が四人いた。

野山で食べ物を探した。五人の兄弟は食せない草が判るほどだった。南瓜の葉には小さな棘があり、どうしても食べられなかった。

戦前戦後における食糧難を始めとする艱難辛苦の時代環境の中だった。

母も見性底の人だった。

しかも、その事を、亡くなる直前まで洩らさなかった。

それも自ら洩らしたのではなく、最後の様子とやりとりで玄魯禪師が気づいたのである。一度も口答えをした事がなく、何でも「はい」と答える人だったと玄魯禪師は回想した。

見性を敢えて隠し、主婦として過ごしている人や、従来通り参禅する人もいるという。こういう人々が存在するというだけで、求道者の多くの杞憂が除かれるように思う。

それは僧俗男女、生活様式を問わず、誤解せず学べば誰でも悟ることを証明している。ある仏道の家系が、孫の代に至るまで見性を継承するという実例は何を意味するのか。

「必ず悟れる」という暁山禪師の言明は気休めではない。

暁山禪師は優れた後継者に恵まれ、住職を引退して自由な立場で伝導に専念している。

知る人ぞ知る古道場は、今も生きている。

「必ず悟れる」

誠実に学べば、あなたは必ず只管に落ち着く。

本当だったと、これは本物だと、気づく日が来るだろう。

・正法と神秘主義

認識体験を軸とする神秘主義と正法の違いを理解しておく事は重要かと思われる。何がどう違うのか具体的には誰も説明できず、同じだという認識が横行している。

多くの覚者や神秘主義に至る、非二元的傍観とでも言うべき境地。

認識が認識自体を自覚する事で、純粋な認知と識別が残り、自我が消えたと感じられる。自我が消えた体験状態も、観ている主体の中に消え、存在の背景、虚空の自覚がある。

そこに至った人間を、それが使うかのようにあり、それは見ることの中で知られ、現象と、存在の背景としての自覚が、非二元的な体験であるのも一つの特徴である。

神秘主義とは体験主体としての認識が残っている事に由来する、解脱への体験過程と結論であり、解脱するために自我ないし自己を浄化滅却する事で、聖なる主体だけが残ったという自負である。

自我に起因する罪、穢れ、善悪、煩惱と、聖なる主体の信仰は、宗教殊に神秘主義に共通する認識である。だから無になる必要がある。空っぽになって、自己の痕跡を浄化滅却し続ければ、聖なる主体だけになる。

制限と束縛である身心からの解脱、それは聖なる主体への消融ないし一体化の自覚である。浄化された身心は聖なる主体の表現となり、ささやかな制限だが、死ねば解脱が完成する。

その前提に基づいて、純粋な意識に留まり、忘我し、解脱したという認識を得る。

これは禅と真逆と言っている。

正法は身心のみである。

縁に触れると、無条件に必ずその通りの活動をするという事実だけ。

これはあらゆる宗教との違いを含むと共に、自我を問題にする全ての概念を否定する。そして同時に、あらゆる瞑想を始めとする何らかの概念なり非概念の行使を否定する。

内側に向かうとか意識であるとか認識状態を矯正するような真似をするのではなく、人間の考える前提ではない、認識以前の誰にとっても一様の事実を確証するのである。

認識でしかない架空の実体を云々するのではなく、事物の実相を究明するのである。

この道は他にはない。

すべてのものは、そのもので解決済みなのである。

只管とは何か。

認識が残る・止む。

この二点は禅の、仏法の要諦であり、正法を他と分ける決定打でもある。

古今の文献や語録を含め、道元禅師以来この二点を明確且つ端的、平易に強調し、説いた実例は、少なくとも私の知見範囲では、玄魯義衍の系譜を除いて他にない。

見性に基づく平語・現代語となると、更に極めて類例がない。

自己を忘じ、身心を脱落して真相に徹した認識は、認識であつて真相自体ではない。見ている、達している認識が残っているために、真相だけになるということがない。

真相に達し、真相しかない、というのは悟り損ねているのである。

認識が止むとき、そのようなものは何も残らない。

主体、対象、見ること、すべてなくなってしまう。

なにもわからない。

真相だけになる。

身心という方法、その絶対の在り方がはつきりする。

背後に何もなく、跡形も残らない、前後なき、而今の時節時節だけがある。

忘自己の認識から方法を悟ったのか。認識が止んで方法から悟らされたのか。

これは、悟り損ねと、見性大悟の明確な違いを教示する卓越した伝統である。

認識がどのような体験に至るか、ではなく、認識以前の事実の真相を悟る。

禅の悟りを求めているのに判らず、外道に陥ることを望む求道者はいない。

釈尊の、祖師の、正伝の仏法を学びたい。

本物の禅を、禅の精髓を学びたい。

だが、見性を得た正師でなければ、どう導いたらいいのかわからない。求道者は正誤に確信が持てず、どうしていいかわからない状況にある。

本物の禪師がいる。

師家は伝えたい。

求める人を救い、自由に導きたい。

本気で求めるならば、あなたは生きた仏陀に会える。
人が妄想の中で想像する仏陀ではなく本物に会える。

今や、庵主禪を地で行く、僧俗超越の仏陀に学べる。

その縁が、あなたを禪の要諦に導く。

今できる事は、今しかできない事であり、次はない。
やり直す事はできず、同じ時節はもう二度と来ない。

暁山禪師は現在、和歌山県に坐禪道場・玄燈庵を施設し、伝導に専念している。
暁山哲玄、或いは井上哲玄で検索すれば、必要な情報を得られるだろう。

今はオンラインでも学べるらしい。

遠方から直接参じる人も、少ないながら全国にいる。

もし、諸々の事情で参じるのが難しく、あなたの近くに私しかいなければ、私が手伝う。

私は現在、千葉県鴨川市に在住し、今は積極的とまでは言えないが何人かを手伝っている。
いずれ現在の自宅を改造し、求める人が自由に学べる禪道場を施設しようかと考えている。

私は宗教家ではない。

手付かずの事実と関係がない宗教的オプションは一切持ち込まない。

回り道せず、認識以前の在り様がどういうものかを、はっきりさせる。
従って、儀式的な事や礼儀作法といった様式美を教える事はできない。

道だけを伝える。

金銭を要求する事はない。

・現代における見性悟道の実際

只管に真実があるのは判る。だが正法眼蔵は手に余った。

やむなく、類似する情報から、その真意を理解しようとする試みが始まる。

酒も喫煙も博打もやらず、風俗にも行かない私の金銭は、厩大な量の書籍に費やされた。

それは、何の役にも立たなかった。

道元禪師に始まる二十年の求道は、その継承者である暁山禪師によって結実する。玄魯禪師の遺した言葉と、暁山禪師の生きた言葉が、正法眼蔵を翻訳してくれた。

それは事物の真相であり、この身心のことだった。

なにもいらない、この身心は解脱体であると仏法は教えている。

こんな事を、誰が、いつ、どこで、わかるように、教えてくれるだろうか。

禅とは事実であって、人の認識内にある精神世界のことではない。考え方に落とし込む事ができず、落とし込んだところで意味がない。

禅は神秘主義だと言う者もいる。

茶を飲むと茶の味がする。これは神秘主義だろうか。

釈迦の仏法はカルマ・ヨーガだと言う者もいる。

音がすればその通りに聞こえる。これはカルマ・ヨーガだろうか。

正師に縁すれば、方向が違うという事を理解するのに時間はかからない。禅の正師はスピリチュアル・グルではない。だから正師が必要なのである。

事実が考え方の範疇にあるという認識は、充分スピリチュアルで正気ではない。自意識過剰な理想や希望、それが妄想による現実逃避だと気づく必要がある。

そして、今、直接、学ぶ事ができるのが、現代における見性悟道の実際である。その事実、言葉や活字から感じる印象と違い、なにも大袈裟なものではない。

古仏に学べるのは今である。

いつかではない。

今回、厳密詳細な学術的記載を避け、体験の経緯と事実に基づき、学ぶ上での要点と思われる事や、問題の焦点となりやすい事を、思いつくまま言葉を並べ散らし、読み易く興味を引くよう心掛けた。

暁山禅師の略歴などについては、禅師に確認を取りながら記載していったので間違いはないと思う。暁山禅師の話は大変興味深く、印象に残るものも多いが、著述の主旨に沿うものだけを取り上げた。

そもそも文面自体が使い物になるかわからず、暁山禅師に目を通してもらい、

「面白い」

と、楽しんでもらえたのが励みになった。

個人の勝手な見解を述べているだけなのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが、駄目出しされる事もなく、目に余るほど見当違いな事はなかったのではないかと思う。

人物に触れる以上、一応許可を得ているとはいえ、この文面の内容と責任は、私個人に帰するものである。従って、如何なる批判も私個人にしか該当せず、向けられる筋合いはない事を誤解しないようお願いする。

私は宗門関係者や暁山禅師の身内ではないし、どこにも属していない。

信者でもなければシンパでもなく、暁山禅師と個人的に縁しただけであり、言ってみれば、真相に精通した部外者の暴露話のような性格の著述である。

(あの時、こういう事を、こういう風に、誰かが教えてくれたなら) という著述は未だ見当たらない。故に頼まれもしないのに体験に基づいて著述し、正法を求める誰かの助けになりはしないかと試みた。

誰かの見解に沿わず、反感を抱かれ、参考にもならない、という事もあるかと思うが致し方ない。

だが、今、現在に、悟を得た本物の禅師がおり、学べるという情報を提示できた事は良しとしたい。参禅会・接心等については関係者ではないので分らない。関連サイトなどでよく確認して戴きたい。

暁山禅師に簡単な所感を兼ねて、禅の現状を概観してもらえたら、それを加えたいと思う。

禅師に嫌がられるかもしれないが依頼してみる。

この著述に関する用件があれば、禅生雲のサイト、或は、武道稽古場 生雲のサイトから私と連絡が取れる。

アマゾンの書評のような意見や評価や感想は御遠慮願う。学術書の受け売りによる見解や批判にも応じる事はない。

一般に手に入るような資料に書いてあるような事は、私も大概知っている。議論や屁理屈に応じるほど暇ではないし、個人の解釈に意見する気もない。

私は見世物ではないので、好奇心や興味本位による問い、要求には応じない。

見性の描写は、見性によってのみ当然のものとなる。

思考で先取りする事はできず、記憶や経験の中に所有できない。思想や哲学として理解し、わかったような気になるのとは違う。

禅は知的玩具ではない。

生死の問題が認識内で片付くこともない。

人が考える生死とは認識のことではない。生命の事実は認識以前にある。実際には死体であれ、生体であれ、生滅する活動の真つ只中に認識はない。

今、因果同時即滅相続の自受容三昧、その無窮の活動があるだけである。その背後に本体も、何らかの主体も、なにも残らない自由自在の解脱体。

生は生、死は死、時々刻々、毎瞬、前後なき時節、時節、自ら然る。

生死などない。

今、ここが、生命の根源、その絶対の活動が身心、即ち仏性の時節である。

私は暁山禪師と縁する事がなければ、このような著述をする事はなかった。言葉がどれほど実際と乖離しているかを知っている。主張したい事もない。

自らの明日をも知れぬ時代環境の中にあつて悟道を歩み、成道し、人を救おうとし続けた。今も尚、変わらず救おうとし続ける。古仏の存在に触れ、黙っていることができなかった。

この文面を見た誰かが、これをきっかけにして正法と縁してくれたら嬉しい。

玄魯禪師の語録書籍に興味があれば、半田山龍泉寺のサイトから入手できる。精読し、不明点を尋ねるために参じれば、文字を超えた真意に触れるだろう。

暁山禪師に参じる方々に、くれぐれも非常識や失礼のないよう御配慮願う。

すべては学ぶ側にかかっているという事を忘れないで欲しい。

所感

岩城玄居士の著述の所感を求められ、最初目を通した時は、面白い、もつと簡潔にならんものかと感じましたが、修正点の指摘を求められ、何度か読み返す中で、削除、加筆は必要ない。出来ない。

私の著述でなく、人の文章に手を入れる事はすべきでない。

このまま、御自身で手を入れられるよう願う事にしました。

求道の方々の大いなる指針となることでしょう。

「己事究明」真に求道の道を歩まれ二十年。

私との御縁は、令和四年二月。大悟徹底の井上義衍老師という方が居られた事を知るも既に遷化と。義衍老師の語録が出版されておるを知り、入手についての問いに私が返信すが、ご縁となりました。

ご自身の体験から、見性悟道の正師が現在している事を知り、そして、ご自身もその人となりました。

正師を求める真の求道者の方々に、その人なりと、世に伝えずにはおれない真情にて書き下された一文に触れ、一人でも多くの求道の方々に、「仏道は自己なり」と、この身心一つで、この身心の真相を、この身心を以って実証する釈尊直伝の正法とは、他から学ぶものは兎の毛ほどの事もない事を、この身心にて確証していただく御縁となればとの思いから、居士自身の艱難辛苦、二十年の求道の歩みより示されたものと深く感じ入っております。

仏道とか、法とか、禅とか言っても、全て、この身心の活動、働きのこと。

故にこの身心から外に向かつて求めることの間違い、これは釈尊以来、仏祖方が歩まれ、悟により確証を得た自己の身心の在りようを、体験者から体験者へと伝えて来た道です。

この身心の活動は「今」、やり直しは不可。

思いは、やり直したいと思えるのですが、それは終わった生き様のカスです。

他から学んだ知識が中心となり、そこから自分自身を眺め、観察し、教えの通りにこの身心を考え方で作り替えようとする誤り。

あなたが学んだものが先か、この身心の活動が先か、言うまでもない事です。

生れた時から戴いた六根の働き、それを仏性とも、道とも、法とも呼びます。

自己中心の人の思いを用ゆることなき、万人一様の道あることを仏陀は伝えんとしております。今や「悟」は死語となり、悟を得た人も絶えんとしておる中、玄魯門下に現存していることを。

どうぞ、この門を叩く真の求道人の来訪を願っております。